

おどろきたりけん、一どにばつと立ける羽をと、いかづち大風などのやうに聞えければ、平家の兵共略○中こ、をばおちて、おはり川すのまたをふせげやとて、取物もとりあへず、我さきに／＼とぞおち行ける略○中そのへんちかき宿々より、ゆう君、ゆう女ども、めしあつめ、あそびさかもりけるが、あるひはかしらけわれ、あるひはこしふみおられ、おめきさげぶ事おびたし、

〔明月記〕建仁二年二月十五日、今朝路頭遊君各賜衣裳云々、如予定家藤原貧人不入此中、兼定一昨日被仰備儲、以如此事、已以出身云々、申時如例、遊女郢曲等了、早出不知其後事云々、廿一日、大臣以下會合如例、懸御簾、放障子定事也、女房見物料也、午時計出御略○中遊女列坐、亂舞如例、

〔庭訓往來〕可招居輩者略○中傾城、白拍子、遊女、夜發輩、

〔海東諸國記〕日本國略○中

富人取女子之無歸者、給衣食容飾之、號爲傾城、引過客留宿饋酒食、故行者不齋糧、

〔倭訓栞中編七〕けいせい 漢書に、一顧傾人城、再顧傾人國と見ゆ、よて傾國ともいふ、我邦娼家の稱たり、此事海東諸國記にも見えたり、武平一が詩に、常矜絶代色、復恃傾城姿といへり、

〔貞丈雜記人品〕一傾城といふも遊女也、今の世のごとく、三所にあつまり居らず、所々にあり、大名の家などへもめし寄て、酒宴の興を催し、歌ひ舞ひ、酌などにも立し也、傾城、白拍子に銚子の渡し、様折紙など遣様、馬など引き遣す様などの事、舊記に見えたり、唐にて傾城といふは、遊女の事のみにかぎらず、總て美女の事を云、うつくしき女は、人に城をもかたぶけさせ、國をもかたぶけさせる物也とて、傾城とも傾國とも云也、傾はかたぶくると云字にて、ほろぼす心也、

〔異本洞房語園上〕いにしへより、けいせい、遊女の稱世に傳へし事久し、異國には、傾城といひ、遊女といふに、隔別の義理ありといへども、爰にけいせいといひ、遊女といふ、其品二つ有事なし、異國の妓女、本朝の白拍子、皆遊君のたぐひ也、